様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　5 月 25 日現在

研究種目：若手研究（ｽﾀｰﾄｱｯﾌﾟ）
研究期間：2007～2008
課題番号：19830056
研究課題名（和文）　政治制度と市民的自己決定の間の齟齬－ベルギー型連邦制の脆弱性－

研究課題名（英文）　The misfiring between the political institution and the civic self-determination-the vulnerability of Belgian federal system

研究代表者
松尾　秀哉(MATSUO HIDEYA)
聖学院大学・政治経済学部・准教授
研究者番号：50453452

研究成果の概要：
本研究は、ベルギーの連邦制度の問題点を明らかにするものである。ベルギー型連邦制は、しばしば多民族社会の統治手法として「モデル」と理解されているが、93 年の導入以来、今もなおベルギーは様々な政治的・社会的問題から免れていない。本研究は、この問題が「モデル」とされた連邦制度自体に起因していることを指摘し、さらにその制度運用に当たる政治的リーダーの行動が重要であることを指摘した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	540,000	0	540,000
２００８年度	910,000	273,000	1,183,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,450,000	273,000	1,723,000

研究分野：政治学
科研費の分科・細目：政治史
キーワード：ベルギー政治、連邦制、民族問題

１．研究開始当初の背景

ベルギーは建国以来、フラマン民族（オランダ語）とワロン民族（フランス語）による、内的な、言語の異なる二つの民族の対立（言語問題）を抱えてきた。特に 1960 年代にその対立は激しくなり、そのため 70 年からベルギーはそれぞれの「言語共同体」の自治を認める分権化を進めざるを得なくなり、最終的に 93 年に連邦制へと移行した。このベルギー型連邦制は、しばしば多民族社会の統治手法として「モデル」と理解されてきたが、今もなおベルギーは、民族対立に起因する様々な政治的・社会的問題から免れていない。申請者は、過去、60 年代の言語紛争に焦点を当てて学位論文を執筆した。本研究は、その手法に依拠しつつも、現代のベルギーが抱える問題の要因を、新しい手法を導入すること

で明らかにしようとした。

民族対立に苛まされてきたベルギーではあるが、その政治史に対する研究は他の西欧諸国と比較して多くはない。そのなかで最も重要な論考は一連のレイプハルト（Lijphart, Arend）のものである。彼は、社会的多元性を有しながら、長く安定的な民主体制を維持してきたベルギー、オランダといった西欧小国の民主主義を「多極共存型民主主義」と類型化した。彼によれば、これらの国家群では、各分断区画を代表する政治的エリートたちが「協調的行動」を採ることによって安定が維持される。

2007 年 3 月に、申請者は東京大学より博士号を授与されたが、そこではこのレイプハルト・モデルを再検討し、60 年代においては、エリートたちが協調的に行動したために、逆説的にベルギーが混乱し、抜本的な統治制度改革に導かれたことを示し「わが国初の本格的現代ベルギー政治研究」と評価された。ただし、拙稿は、一連の連邦化改革の原因であった 60 年代政治過程の分析に終始し、その現代的意義の考察には至らなかった。その反省にたって、現代のベルギーの混乱を明らかにするためにも、学位論文の手法を踏襲しつつ、しかし部分的に刷新し、ベルギー政治を見直す必要があると考えたのである。
つまり、多民族社会統治の模範的モデルとされるベルギーの連邦制ではあるが、実際には連邦化以降一層ベルギーは不安定であることが研究の背景にはあったのである。

２．研究の目的

こうした近年の状況については、まだ間近な出来事ゆえ、ジャーナリスティックな論評にとどまっていると言わざるを得なかった。そのためベルギーの問題の全容を、包括的に把握することはできていない。この要因を明らかにすることが第一の目的である。また、従来「安定的」とされた本国家の制度が、現実のベルギーの混乱を眼前にして、実際には脆弱であることを指摘する点で、本研究はレイプハルト以降の多極共存型民主主義モデルの再考を促すことを第二の目的とする。さらに言えば、これは、60 年代に着目した自身の博士論文研究の続編であり、60 年代の政治過程の現代的意義を明らかにするという目的を有していた。

３．研究の方法

第一に、人口移動の状況（社会的流動性）に着目した。ベルギー市民が、通勤・通学に便利な首都ブリュッセル周辺域に集まること、「欧州の首都」とよばれるブリュッセルに、特に（フランス語系）アフリカ移民が伝統的に多く集まるという二重の「社会的流動性」によって、周辺域の言語状況がどのように変化したか、を見た。

第二に、そうした流動性に対して、いったん成立することによって市民の行動を拘束する「政治制度」が、どのような問題を生み出しているか、を検討した。

第三に、以上の社会的流動性と、固定的な政治制度の間の「齟齬」から発生した問題に対して、制度運用に当たる政治的リーダーがどのように対応したか、を検討した。もちろん政治的リーダーはこうした問題に迅速な対応が必要とされるが、しかし彼らは無尽蔵に自由に行動できるわけではない。何らかの制限が彼らにはある。そこで、連邦化による政治的主体の多様化、さらには EU 本部を有するがゆえに、EU 政策におわれるベルギーの政治的リーダーは「時間」という政治的資源を枯渇し、こうした国内問題に対応しきれない場合があることを仮説として挙げ、それを検討した。

これらの検討の際に「背景」として考慮し

なければならないのは、第一に地域間の「経済的格差」である。経済的に優位なフラマンが、ワロンの社会保障を肩代わりすることによって、両者の間には対立が生じているからである。

４．研究成果

「ヨーロッパの首都」としての歴史的特性上、あらゆる市民がブリュッセルに集まってくるという「人口移動」の観点、すなわち「社会的流動性」に注目した。

ベルギーにおいては 60 年代以降、首都ブリュッセルに人口が集中した。特に連邦化以降、本来オランダ語圏である「ブリュッセル周辺域」に、フランス語系住民が集中するようになってきた（特に、いわゆる BHV といわれる地区）。このためベルギー政府は彼らに、フランス語政党に投票できる権利を便宜的に付与したが、これがフラマン諸政党の反発を買い、ベルギーが政治的に混乱する大きな要因となった。

さらに、伝統的に（過去植民地であった）アフリカ系フランス語移民が多く、彼らの子弟が学校に進むにつれ、反移民感情が若者の間で強くなり、極右政党の台頭、政党システムの破片化が生じたのである。

第二に、こうした変化にベルギーの連邦システムは対応しきれず、むしろ政治的主体の行動をより民族主義的方向へ引っ張っていることを明らかにした。連邦制度が選挙区の分断を伴うため、フラマンの有権者はフラマン政党にしか投票できなくなった。そのため得票最大化をねらう政党は、民族主義的アピールを繰り返すこととなった。

以上の社会的次元の変化、政治制度の問題にとどまらず、この間の政府対応に問題があったことを指摘した。概してこの時期のベルギーの政策過程は、先に掲げた政治社会的問題が複合的に絡み合い「凍結」していた。この政府対応、すなわち解決困難な問題をアジェンダからはずすことで一時的に問題はおさまるが、しかしこの問題は確実に再燃する。この点は、申請者が博士論文で指摘したものと通底するものであった。

さらに以上のようなエリートの行動と、外交政策との関係を取り上げた。ベルギーは EU 統合の推進者であり続けているが、こうした社会的、政治的不安定下に、ベルギーの政治的リーダー（フェルホフスタット）は、この間 EU 議長を務め、その業務に忙殺された。憲法条約批准で足踏みする EU の現状が、実は政策選択の許容範囲を狭め、「政治的エリートの行動」を制約していたことを示した。

つまり「社会的流動性」に対して、「政治制度」は、中長期的には、対応できなくなる。また、その「齟齬」から発生した問題に対して政治的リーダーの迅速な対応が必要とされるが、EU 本部を有するがゆえに、EU 政策におわれるベルギーの政治的リーダーは「時間」という政治的資源を枯渇し、こうした国内問題に対応しきれない場合がある。

以上のように「政治」と「社会」の相互作用に注目し、「モデル」とされるベルギー型連邦制度の批判的検討を行い、問題点を指摘した。結果的に、本研究は、ベルギーが（申請後）国家分裂の危機に陥ったことを予期するものであったといえる。

また、この研究の過程で収集した資料にもとづいて、以上に付随して、ベルギーの欧州統合政策の理念再考、ベルギーにおけるキリスト教民主主義政党（思想）の役割について検討し、学会などで発表した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①松尾秀哉「欧州統合の停滞と『欧州合衆国』構想―ベルギーの欧州統合政策（二）」聖学院大学総合研究所『聖学院大学総合研究所紀要』45 号、2009 年 9 月予定。査読無。

②松尾秀哉「人口の大都市集中（都市化）と民族紛争―ベルギー型多文化主義から考える現代ヨーロッパ社会の抱えるリスク―」、聖学院大学総合研究所『聖学院大学総合研究所紀要』43 号、397－424 ページ、2009 年。査読無。

③松尾秀哉「ベルギーの初期欧州統合政策―1920―30 年代を中心に―」、聖学院大学総合研究所『聖学院大学総合研究所紀要』43 号、363－396 ページ、2009 年。査読無。

④松尾秀哉「欧州統合過程がベルギーに及ぼす影響・概論」、聖学院大学総合研究所『聖学院大学総合研究所ニューズ・レター』、Vol.18-2、6－9 ページ、2008 年 9 月。査読無。

⑤松尾秀哉「ベルギーの移民事情・試論―ワロン・フラマン対立の再燃と『過去の清算』―」聖学院大学総合研究所『聖学院大学総合研究所紀要』40 号、280-306 頁、2008 年。査読無。

〔学会発表〕（計３件）

①松尾秀哉「ベルギーの国家分裂危機－連邦化以降の政治的主体の行動変化」、日本比較政治学会　研究大会、2009 年 6 月 28 日（採用決定）、京都大学。

②松尾秀哉「ベルギーの国民統合とキリスト教民主主義―マリタンを鍵に」、日本基督教学会　関東支部会、2009 年 3 月 27 日、聖学院大学。

③松尾秀哉「ベルギーの国民統合とキリスト教民主主義政党」、ヨーロッパ地域問題研究会、2007 年 12 月 22 日、東京外国語大学本郷サテライト。

〔図書〕（計１件）

①松尾秀哉「ベルギー国家分裂危機―連邦化と合意デモクラシーの変容」（仮）、田村哲樹編『模索する政治―代表制民主主義と福祉国家のゆくえ』、ナカニシヤ出版、2010 年 5 月予定。

６．研究組織

(1)研究代表者

松尾　秀哉(MATSUO HIDEYA)
聖学院大学・政治経済学部・准教授
研究者番号：50453452

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし